欲下入津雲坂長（入津に下らんと欲して雲坂長し。）

俄驚気候変炎涼（俄に驚く気候炎涼を変ずるを。）

横空一嶺界南北（空に横たう一嶺は南北を界し。）

北麦青々南麦黄（北は麦青々南は麦黄なり。）

（以上）

この頁をかりて、読売新聞佐伯通信部、並に大分合同新聞佐伯支局の方々に、私共畑の浦史談会の研修や作業に対して、適切な御指導と御協力をいただきましたことを、会員一同に代り、心からお礼申し上げます。

レポート

弥次郎貝騒動始末記

編集　畑の浦史談会
資料提供　蒲水谷　小野萬蔵後代　小野太

今年（昭和四十七年）は弥次郎貝が大発生し、その採収風景はさながら源平の合戦を偲ばせ、漁船百数十隻に達し、縦横無尽に海上を駆け廻る。その姿は勇壮そのものであった。

ここに、「漁場妨害差し拒み事件」として争われた、明治時代の弥次郎騒動を、古文書によって記述するものである。

(一) 事の起こり

明治九年三月、畑野浦平民漁業戸高弥太郎外十一名は、「ヨコナゴロ網代・ツクリ網代」を県庁より捕漁採藻として借受けて、以来この網代で漁業を行ってきた。

ヨコナゴロ網代とツクリ網代との海内、すなわち東は大双津網代、西はツクリ網代の西端よりスノ原の西端を見通した海内に、弥次郎貝が多く生殖して、明治十六年頃に至り、弥次郎貝の販路が大いに開け、需用が増加した。ちなみに、明治十六年富沢銀蔵氏が製品（ゆでてむき身乾燥）として、水産博覧会に出品して大好評を得た。

『この頃より西野浦の漁民海内に来るを以って其の都度之を追い払い数年路を絶った』

と記録されている。

（注）明治十六年、東京上野公園で水産博覧会が開催され、当町からも外に漁網の出品者があり、入賞して大賞状を受けている。（現在高山の山下源一氏が所蔵）

このように、水産業界の活発な動きの中で、漁民の手近かな現金収入は魅力的なものであったと思われる。

弥次郎貝は煮てむき身にして婦人が販売したり、更に干して他県に出荷したりして銭になるので、西野浦の漁民がヨコナゴロ網代・ツクリ網代にやって来ては貝を採集する。これを実力行使で追い払い、五、六年間は畑野浦の漁民が独占していたことになる。

長い間のイガミアイが尾を引き、生活を掛けた漁業権抗争はその極に達した。

これが弥次郎貝事件の起りである。

(二) 訴訟の起り

『明治二十四年五月、下入津村大字西野浦（和手）合手　貝生